

◎今週の御言葉 「赦されたバラバ」(マルコの福音書15章1～15節) 「それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後、十字架につけるようにと引き渡した」(15)。 仲森文穂牧師

○総督ピラトは、イエス様に死にあたる罪がないことを知っていました。しかし、死刑を求める議会の要求にも応えたい。迷った彼は、祭りの度に一人の囚人に恩赦を与えるという慣例を持ち出して、「ユダヤ人の王イエスの釈放か、それとも殺人強盗犯のバラバの釈放か」と群衆に問いました。そこで祭司長たちは群衆を扇動して、バラバに恩赦を、ナザレのイエスは処刑に、と言わせたのでした。マタイ27章によると、この時ピラトが「この人の血について、わたしには責任がない」と言うと、群衆が「その血の責任は我々と子孫にある」と答えています。この言葉が、後のユダヤ人迫害史の一因となった、と言われています。ユダヤ人にとって取り返しのつかない、しかし取り消したい最大の言葉でしょう。今日、使徒信条で「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と唱和されて、ピラトには不本意だろうと同情しますが、しかし、あの時ピラトは群衆におもねり、保身の道を選び、イエス様の十字架刑を決定したのです。その責任はやはり大きいと言わねばならないでしょう。

○イエス様の命と引き換えに、赦されるはずのないバラバが赦された、と聖書は告げます。自分の中に赦される根拠が何もないけれど、赦されて生かされている。思えば、私たちもあのバラバのような存在なのかもしれません。

皆さんは、自分をいやな人間だと思ったことはないでしょうか。私はあります。悪いことをしたかもしれない時に、言わなきゃ分からないというささやきに甘えてしまった子ども時代の体験があります。高校生の時、太宰治の「人間失格」を読み、「恥の多い生涯を送って来ました」という言葉に妙に惹かれ、その単行本をずっとポケットに入れていました。その1,2年後、教会に行くようになり、人はみな罪深い存在だと教えられた時、妙に納得できてしまう自分がいました。バラバ同様、私にも「赦されて生きる」ことを神様に要求できる資格などありません。ただ、主の十字架の恵みによって、赦しの道が差し出され、「生きよ」と呼びかけていただいたのです。私自身、イエス様によって救われたバラバのような人間の一人です。

伝説によれば、バラバは「死なない男」とあだ名されて生きていきますが、残念なことに、イエス様の代わりに生きながらえたことを重荷に感じていくのです。でも、私は思います。重荷と感じるのではなく、恵みと受け止めて生きる道を選びとっていかなければ、イエス様が悲しまれるだろう、と。

今日から、受難週が始まります。赦されたバラバとして、新しい命をどうとらえ、どう用いていくか、今一度自分を見つめ直しつつ、この一週間を歩む者でありたいと思います。 祈り。